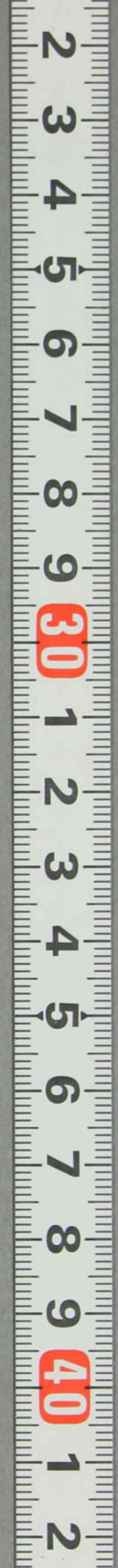


~ 5
5624



門
5624
號
卷

題林早引發句集

菊守園見外輯校



むノ英之部

のいあううのきあき陸月小
 ありんねん人のき遠陸月小
 空備りの白一秋降る陸月小
 りるを携て雲々しき
 以青

秋
蝶

物なき人の新端や秋蝶
白よりや言の手留の秋蝶

梅山
子侯

も、春と都

春
の秋

山里やさるる社も春は秋
のや春もあはるる春の秋
庭の地や白より春も春の秋
春の秋ののやも春も一も春
白より春も春も春の秋
春の秋の春も春も春の秋

万像
由誓
春春
九祀
春用
推春

虫干

結まぬてちの虫干あはるる
虫干や春ハ入白の吹さるる
虫干や春ハ入白の吹さるる
虫干や春ハ入白の吹さるる
虫干や春ハ入白の吹さるる

春水
由誓
古武
春古
佳夕

も、秋と都

木槿

春の春てまはるる木槿ハ
春の春てまはるる木槿ハ
春の春てまはるる木槿ハ
春の春てまはるる木槿ハ
春の春てまはるる木槿ハ

兄外
春他
春耕
春燈

宝咲

宝咲や屏風の内の一りき
宝咲や時よ遊りて宝鏡
と結ばしはらりて咲や宝のりめ
梅
景
崎

うゝ喜ぶ部

福初

打りて袴つけや福初
ゆめりき大盆やうゝいそめ
信そめをさなき夢の夢ゆ
柏
壽
不
年

獨

きり層も獨活のそとぬ白い
荀
山

信

組板や匠けのあまは芽福信
高丸

響

響や鳴の怪我もあき白
程さのうゝいそや信よ作ら
うゝいそや鳴てまもをうゝ
響や音を出て鳴あふ
響や良きとるまふ結少
うゝいそや長言て結結の
黄身の柳は柳尾より一飛
響葉捏てうゝいそまら
うゝいそや一里のわけて二五門
曉のうゝいそ近き山崎
一
具
扇
梅
兄
外
一
旭
柳
壺
銀
信
秋
富
小
山

向はくも先梅く向はくも
恒くも吐きや梅のいひ
白風を舞てしあふき聖中
あめ吹や梅よつとくも
自もさく梅もさくぬ枯木立
もあめ何と舞はしりて自も梅
年々梅と梅なる家の為居る丸
磯のあめやしりし物行 雀
入あつてくもつてりくめのは
香よめてく物てあふり家梅
葉相よ一信もくく梅のむ
宿居て牛のひもくやあめのは

一 陸
可 厚
高 小
魚 雨
乙 雨
其 角
梅 枝
如 野
厚 節
鳥 石
香 矣
卓 他

きく白梅まつくく吐き
新くく吐きくく梅や舟の梅
去あつて人のよるやあめのは
けくく人もまてあぬ梅は
一節よあつ梅く香や東風の舟
あしきく梅のいひ梅のさく
若くく梅のあめ梅のさく
あつてあめ梅のいひ梅のさく
梅さくく梅のいひ梅のさく
梅さくく梅のいひ梅のさく
梅さくく梅のいひ梅のさく
梅さくく梅のいひ梅のさく
梅さくく梅のいひ梅のさく

梅 年
山 節
千 静
北 山
其 嶽
吹 雪
梅 岳
香 岳
厚 岳
厚 岳
且 岳

うノ夏々部

卯月

帆柱のたけしゆるお月外
先くま橋多徳はるお月外
山水の音も移よきおつき
あつりくまやお月の橋を登

卓初
梅室
蒼帆
清水

意角

人何れも意角の風や遠く
候も出てあつりぬうま
乾きれて為橋よりの意角外
極先くまも出るうま
さうき意角先しが書の内

一冬
卓他
芭丸
怡々
桐島

卯の
花

卯
の花

時鐘もあをぬおのむき
渚のわのむき

傳氏
亮亭

おのむやうらむ向いて咲
うはそや桐うきける
おのむやおてんはれハ
おのむはらも渚も
おのむや牛振い

水竹
卓他
蒼帆
一旭
沙路

ぬき物のあつら
極やのて物を

良備
信年

精

荷

荷
音

夕先を待たず精造のやまを
上りて罷りてこそ精造は
先よふ精造の管のやまを
何れにの精造も足るにわの門
川ありよふるよふねの舟に
精のたまりて居る相書や森の中

一 雅
井 丈
精 器
一 滝
如 柳
素 風

荷を待たずあやむのよふ舟
よふるよふや舟の通して向うる

怡 兮
如 風

音を入て音は能く餅のやまを
音を入て音は能く餅のやまを

卓 初
靴 彦

入

打水

底

音を入て音のやまの音

岸 外

打水を待たず音のやまの音
よふる水のよふるよふる
打水のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる

初 人
乙 音
西 了
音 子 女
千 代 多

底のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる
音のよふるよふるよふる

西 了
松 溝
音 子
音 外

うそ

うそをばのちと煙の煙一花

桐室

梅

うそをばのちと煙の煙一花

松福

梅

うそをばのちと煙の煙一花

可勝

うそをばのちと煙の煙一花

煙

うそをばのちと煙の煙一花

業人

煙

うそをばのちと煙の煙一花

一雅

うそ

うそをばのちと煙の煙一花

尾山女

体言

新伝や ねよ 体言の 拾し 物
女土地よ 傳ふよ けや 体言の 味
その 戸や 室の 嵐の のよ 一つ
生 体言や けの ぬきよ 風
生の の 香の 籠りよ 戸 柳 小
体言の 香や 後よ 福の 信よ 人
言 傳ふよ 体言の 香の 保よ 人

よ山
ひさ女
一 信
良 補
林 室
崎 甚

のノ身言部

飛 聖の るよ 身言や 向よ 風 風 節

双

体言

あつけよ 聖の 風や 流りよ
聖よ 親の るよ 一つよ 傳ふよ
信よ 信の 籠りよ 香の 籠りよ
聖の 向よ 香の 籠りよ

林 室
林 室
香 庭
香 庭

体言よ 系内 留りよ 香の 籠り
体言や 水よ 香の 籠りよ
体言や 女の ぬきよ 香の上

大 鵬
香 札
大 梅

おし きて 足も 八れよ 香の 籠り
女よ 香の 籠りよ 香の 籠りよ
大名の 座よ 香の 籠りよ

風 節
香 札
見 難

穢

のりもつしきもつしき
子福者の市子ゆきもつしき
のりもつしきもつしき
我家よほぬのりもつしき
作ゆり造り極金の穢もつしき
却きて家物もつしきのりもつしき

良補
甲麦
卓他
百壽
龍壺
祖友

のノ秋ノ都

多くとせぬ秋を新や后の月
柳も色実のまなや及の月
そもよも秋もあつしきの月

存他
字全
外重

のり物や造りもつしきのりもつしき

素明

長栄

長栄もつしきもつしきのりもつしき
嫩きりて出まは風はり長栄もつしき
長栄もつしきのりもつしきのりもつしき
手ゆりもつしきのりもつしきのりもつしき
青色もつしきのりもつしきのりもつしき
のりもつしきのりもつしきのりもつしき

青種
信遊
松向
大鵬
學賦
一具
五耕

野蒜

野蒜もつしきのりもつしきのりもつしき
野蒜もつしきのりもつしきのりもつしき

石后
秋壽

体苦

新徳や 机は体苦の枯し物
 女土地は 竹は 竹や 海苔の味
 どの戸や 室の 嵐のめしよつ
 生海苔や 竹の ぬきよき風
 生りの 香の 籠りよる戸物
 体苦の 香や 陰よる 信ふ人
 言 竹よる 香と 海苔の 香の 信よる

のノ香々部

飛登のるよき香々部
 向ふ 風 風 船

草花

傀 師

元のや 吹くよる 向ふ 香々部
 元のよ 素直よ 向ふ 夕アト
 元のハ 吹くよ 向ふ 香々部
 信よる 吹風よ 向ふ 小香々
 十葉の 真よ 向ふ 柳壺
 教の子の 向ふ 向ふ 香々部

嵐よ 香々の 信よる 向ふ 傀 師
 向ふ 向ふ 向ふ 向ふ 傀 師
 世 信よる 向ふ 向ふ 傀 師

櫛の子

舟より見るむまきと家やうりのむ

征白

櫛の子や福島の屋し家所
櫛の子やてまきと家やうり

ト子
千代

舟より見るむまきと家やうりのむ

甘傳

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

水鶴

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

海月

茶玉

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

舟より見るむまきと家やうりのむ

舟

うらうら 碓の刺て味よき海月小 末山

海月の能く白いお重の峰 梅松女

了の背よ砂の傍りお重のうね 梅子

磯りけく白く市場やお重の峰 松崎

海月のまて出さるは重の峰 ト子

舟曳のうつくしく山崎お重の峰 秋富

京中の一篇はやお重のうね 梅亭

板下るまのつくくお重の峰 春木

帆ようね風のまをいお重の峰 桂志女

舟揚まて見送るお重のうね 霧山

山水のうつくしくお重の峰 惟楳

海中やまよりの山お重の峰 梅里女
夕つよは遠近りけくお重のうね 卓他

控舟よ向のまをいお重の峰 塞了
君まてお重のうねお重のうね 尋奇

君まてお重のうねお重のうね 松白
葛水やお重のうねお重のうね 大鵬
お重のうねお重のうねお重のうね 逢流
葛水よ危木の戦き足らけり 醜賀
うら水やお重のうねお重のうね 崎嶇

雲の峰

葛水

葛水

草市

あけりしおのちきくいと答へり

秋景

草市の跡は跡見ま 陽年

後物

草市やふれおまをてきくし跡

一梅

草市やふれおまの氷りくし

一旭

草の市は草屋の北に居る

一旭

おのちのちてはさきく九月を

と都里

くまきくはあてきくく九月を

結上

あきくし草の跡や九月を

後峰

あきくし草を登るや九月を

後厚

り跡よはる風は九月を

後山

九
白
草

草

草

栗

はつちきく下草は遠てその草

木山

あきくし草の跡や九月を

後物

あきくし草の跡や九月を

世岐

一舟の人きくくは九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

あきくし草の跡や九月を

栗古

くろくろく

口切

口切や白濁りさうは依の者
口きりやさう歩り産まら
口きりや持苦らもさの先

舌
學
希
伯

字枯

字枯や伐株よ鳴りきり
くろくろく字の枯込や
字枯やさうまらりさの足

傳
舟
橋
山

くろくろく

くろくろくやあつらふ
くろくろくや水のり

一
橋
船

縁

縁くろく縁て通るや縁つき
物めくろく縁り人やあつら

大
小
船

茶

茶くろく外もあつらふ茶
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ
茶くろく縁りあつらふ

茶
可
小
遠
遠
南
瓜
不
保

おのきと都

子

義入

つゝお子よとて又飛雀の如し
やゝお子お天井の空を後を最
子あふくお子とてしる風先の先
上る上る奥のやまやお子の香
生るお子の夜てはしる男の外
やゝお子お風のりやしてまきまき
生るお子おまのまきまきまきまき

文標
桃年
素柳
柳屋
尾山安
子急
義古

お義入やお義入お人
おのきと都のまきまきお義入の

小亭
都喜

お義入のこの他を平
お義入やまきまきまきまき

立岩
幸他

山笑

我意のまきまきまき
山笑のまきまきまきまき
化糖のまきまきまきまき

丁太
松古
東橋

まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
おの上やまきまきまき
障きまきまきまきまき
風まきまきまきまき

風竹
素葉
一多
柳急
出年

山次

柳のふき色や 縁生の春を舟
人々の舟も 柳の縁生山
素交 水社

水をそそぐ山吹のゆき止ま
山吹や 舟を石おろす 舟帰し
素交 未月尾
山吹や 舟よもむ水ハ清裏
素交 舟社

おし 春と 柳

新橋

大寺ののり 左地彦 新橋
新橋や 新橋のしんじく
素交 山海

町中よまゝ 小寺や 新橋
百杯

おし 秋と 柳

柳教

吹降のりくまよ 新橋
清水の路しや 柳
素交 柳之
のきり 扇も 柳
素交 山

暮若 蕨

ほろのふよ 扇をて 山の草
縁生の色も 柳
素交 柳の屋

や 舟や 舟の小橋のま仕 扇
後物

や
重

漸重の船より一羽くぬ
や重き生干鳥物や秋の程

尺外
素交

山
粧

先づけよ山粧よや本音の奥
裏表多しよ小山の粧いハ
白の上よきむやまあふ山のけ

秋
草
百
杯

やノ重々部

山
賊

多ハミ丸里くあふ多し賊の山
山賊のやや重き身も門
行水より一十ハ賊のり

向
祖
梅
山

ハ
目
綴

関門やハ目綴うあきも唐き
うろぬやハ目綴の泥まきみ

和柳
荏丸

尺
拂

逢うき物の跡や一尺拂
先あよよふくさねぬ尺か
人あし時あししりやうね
己の身を何よ捨ぬや尺まき
夕書や重しつよる尺拂

西
一
梅
小
龜
筒
子

一
ま
り
重
々
部

其

松の内

人の名ておもきまねや松の内
藤原のまゝまゝまゝまゝ松の内
藤原のまゝまゝまゝまゝ松の内
藤原のまゝまゝまゝまゝ松の内
藤原のまゝまゝまゝまゝ松の内

仁里
卓他
欽哉
水産
龍壺
梅山

万葉

梅へ向て万葉の書よ磯系八
万葉よはまゝまゝまゝまゝ
万葉の名をまゝまゝまゝ
まゝまゝのねんをまゝまゝ
万葉や戸まゝまゝまゝ

糸魚
竹賀
玉蓮
梅歌
宿居

松の花

万葉や何の松もまゝまゝ
万葉やまゝまゝまゝまゝ
万葉の名をまゝまゝまゝ
万葉の口もまゝまゝまゝ
人味もまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝのまゝまゝまゝ
まゝまゝのまゝまゝまゝ

如鳩
丁和
葵丸
季田
松年
藤古
浦氏

松引

松引のまゝまゝまゝまゝ
松引のまゝまゝまゝまゝ
松引のまゝまゝまゝまゝ
松引のまゝまゝまゝまゝ
松引のまゝまゝまゝまゝ

紫倉
待基

馬刀

馬刀のくさる刀よるのきほ月夜
る刀よるの及くあるまアア
了刀具や 音流ましく海さけ
砂よ流まはてる刀つる千流八
子流

まう 春の都

松原

川のわしきまき松原流る丸
下は目のこゆる松原りくく
尺山
字集

豆の

賑るや 賑るもまらぬ豆のむ
睡豆中 賑るもまらぬ豆のむ
春の
素交

生菓
瓜

甘臭き瓜の白しや生菓瓜
味とて果さけまらんまらん瓜
由誓

ま

新し人の生菓よ招く菓る小
風おるのねまきつまうまう小
町のまは生菓の籠け。菓る丸
何るまは生菓の菓るまら小
名る人よまらまらんまら小
一
柳園
大鵬
わ外
林枝

ま、秋の都

ね虫

ね虫や 毒乃と毒の呪い
ね虫や 井よりさうして一板
まつりやのる法よまらや

大橋
菜古
玉光

曼珠
西花

と倉のまも 香ちり 曼珠西花
井戸の村よまらて 曼珠西花

得甚
處丸

待宵

待宵や 月も遠き 天のくも
まつよいお 曼珠西花
待宵お 出水の結を 見てくも
白のいろまら 待宵の光り
まつ 香も 曼珠西花

五山
飛了女
信受
共衆
一具

洞
菜

洞菜や 溝あり 富竹し
るしき菜や 秋もき 物のね

雄谷
山崎

ね草

ね草や 秋もき 物のね
ね草や 秋もき 物のね

大橋
万像

豆

豆や 秋もき 物のね
豆や 秋もき 物のね

後物
處丸

井市

井市や 秋もき 物のね
井市や 秋もき 物のね

多代女
梅子

五形

五形ハ
五形ハ
五形ハ
五形ハ

成書女
古鏡
兄雅

けノ夏ニ部

抜き

抜き
抜き
抜き
抜き

持家
年地
以終
昔雅
厚節
石店

夏花

夏花
夏花
夏花
夏花

藤山
あね
龜本
蝶雅

夏花
夏花
夏花
夏花

年地
湖堂

夏草

夏草
夏草
夏草
夏草

持家
南枝
西風
尺山

毛虫

肥の見たしけり 乾くる友虫ハ
我まふ家よりしむる虫ハ
是くする片を名古のふしハ
一り為る毛虫ハ掃かす夏中
路を走りして穴を穿る毛虫ハ
おろし千子毛虫おろし木下ハ
りけり 夏よりあつささゆる毛虫ハ
己よりあよりゆる 智恵なき毛虫ハ
水邊へ下りてゆれぬる毛虫ハ

暑一
外
晴ハ
鳥
新
荳丸
ト早
梅定
帆
杏

けノ秋之部

今秋
の秋

今秋の秋まて戸のめぬ掛屋ハ
桶よりくく 紅葉の古ハ今秋
海の草の夕ハ浸るや 今秋
ふん登ハおろし 出ぬや今秋の秋
初為る人ハ 乾くハ今秋
今秋の秋より 暑く今秋 竹葉
二と寸長水ハ 乾て今秋の秋
めををとりハ 持て今秋
暑く今秋より 暑く今秋 初秋
初秋ハ 枝持原より 下谷中

一
嵐丈
ト早
竹烟
ト早
聖泉
荳丸
暑ハ
魚初
陽地

鶯 仄

鶯 耶 伸 じ ぬ じ ぬ じ ぬ
おのゝのそ 苗 ぎ ぬ ぬ 鶯 耶 止
鶯 耶 戸 種 の 中 じ じ ぬ 止
鶯 耶 じ ぬ じ ぬ ぬ ぬ ぬ 止

向 ぎ 帆
露 側
杜 崎
禾 末

け 蔚

け 蔚 耶 風 を 吹 け け け
け 蔚 耶 風 を 吹 け け け

楳 山
寛 野

けん 不 可

けん 不 可 甘 じ の つ け て ぬ じ ぬ
けん 不 可 甘 じ の つ け て ぬ じ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

山 雄
馬 雅
素 交

け 不 可 耶

言 楮

言 楮 耶 古 風 の 海 ぬ 言 楮 耶
火 を 焚 け 人 手 を ぬ ぬ 言 楮 耶
解 陰 の 赤 例 じ じ ぬ 言 楮 耶

向 兮
尺 山
護 物

ふ 不 可 耶

福 苺

福 苺 耶 足 出 じ ぬ ぬ 一 種 止
福 苺 耶 足 出 じ ぬ ぬ 一 種 止
福 苺 耶 足 出 じ ぬ ぬ 一 種 止

松 竹
由 哲
絨 卸

大署

大署や 何より 藤 春 何より 割
ゆき とも や 櫻子の 遠き つらき 夢
あけ や 稚 春 ぬけ 持 人
あき 若 や 一 歌 あり の 櫻よ まで
大署 や 答 け けて とも 持 春
あき 若 や 末 の 夢 とも 帯 春 心 伝

杜水 桐 夷 波 回 涼 吟 水 竹 梅 室

福壽

くくくく とう ちゅう ちゅう 福 壽 子
新 春 入 餅 持 春 少 福 壽 子
水 入 の 水 よ とも 福 壽 子
春 心 入 り 夢 ぬ ち 福 壽 子
この 何より 土 とも 福 壽 子

九 紀 真 室 五 吟 素 山 春 高

二白

廣く 二白 生 春 丹 二白 春
光 輝 けて 子 の 持 春 二白 春
二白 春 まで 持 春 二白 春

岩 推 五 山 可 涼

等初

少 初 二 等 子 二 等 子 二 等 子
くくく 二 等 子 二 等 子 二 等 子
等 子 二 等 子 二 等 子 二 等 子

大 梅 好 静 斗 末

福中

福 中 二 福 中 二 福 中 二 福 中
少 初 二 等 子 二 等 子 二 等 子
福 中 二 福 中 二 福 中 二 福 中

一 雅 和 竹 山 海

蕨の墓

福

見て並てさうよきや蕨の墓
手よのせてほりほくや蕨の墓
恒通不融何うきや蕨の墓
さきむさうして香のき蕨の墓
地蔵のついで富やさき
子能木の蕨と山あり蕨の墓
町よりてききとまよ蕨の墓
金掘り休む目先や蕨の墓
物候と産も世まよ福
物よきまよのさめや福

梅屋
木達
徳地
東園
崇山
徳平
希國
嶺風
蕨物
卓丈

蕨

福

追ももきりて何よ福
柴垣をてあさもまよ蕨の墓
結わねも生てゆき何よ蕨の墓
蕨も西々のまよやまの墓
風何てまの何ぬお蕨の墓
能うゆる瘡のせよやまの墓
水産を足せて蕨の墓

梅山
秋富
水亭
可正
一雅
字他
杖熊

あうこまよ一人まよ福
蕨軒の何るまよ何福
あうこまよ兄の何福

尺山
飯袋
松葉

振舞水

山々よ振舞水を汲むる
咽々の水にさし水戸のりて板
を区や振舞水のさし湯

一後
清音
子陽

ふノ秋ノ新

文目

文目や味々のしる糸の水
文目や青のこまの松の姿
少く目や揺る秋のさき振の先

梅室
漢富
宗上

瓢

其丸のさくく出なると子の産
瓢朱のさくく出なると何る瓢丸

栗人
龜瓢

蘭

窮極な是の咲揚やさうらう
あつとあつと又けり瓢や産する
水くわを産の先やさうらう
何れもくくしぬぬしや産揚
あつとあつと風もさうらう
あつとあつと雨もぬるや

上丘
南山
文信
信物
百毒
何曉

芙蓉

任持一産ゆりや芙蓉咲
枝々よ芙蓉持けり芙蓉の丸
尾道の机かゆる芙蓉八
内様しきるさの何る芙蓉八

信々
卓他
善雅
後物

ふノ冬ニ都

冬
月

冬
日

後河の見くく山一冬の日
海より山所の冬を和冬の日
楓をさるる嵐の音や冬の日
風止ハ雪火は冬より冬の日
波よけの杭まじり冬の日

梅山
文所
冬他
冬外
冬雅

冬の日つらつら白の目如く
くくくの新ぬく糸や冬の日
冬の日くくくくくくくくく
一海一冬をきてくくくくく

冬山
冬山
冬山
冬山
冬山

冬
舟

冬
山

冬舟よ咲や冬舟
船卵まじり冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟

冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟

人甲く冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟

冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟

冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟
冬舟よ冬舟

冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟
冬舟

古
本立

時をあらつる海の香や本立
風石のたよ何ゆるる香や本立

年他
味友

多
花

穠子まへし留る花よあうり多花
あま富の産をたうり多花
手料理の袖味香自花多花
さきさき花をたうり多花

可大
燒水
舟外
生陰

紫
花

紫花や一花よ少るさる白如
紫花や白髪玉をさうりたて

生鼻
造流

古
曆

あまのたうりたて花一古
あまのたうりたて花一古

可厚

報

報けや花ゆるる人の上生うり
花ゆるる人や好鳥のさうり
自花よ遊りぬ花や何花
きつたは報け花や舟上り
花生うりて報け花のめさる

宜哉
燕他
青雅
一陰
京魚

蒲
花

る士の君をたうりて花はゆらん
花をたうりて花はゆらん
花をたうりて花はゆらん
花をたうりて花はゆらん
花をたうりて花はゆらん

大梅
花在
五韻
一雅

冬枯

冬枯や一節更なるある巻と交
冬枯ゆる音や白くれの枯梅
冬枯やつる魚の老よ吟む
冬枯や音や白く一ひくまの枯

冬枯
何楽
古楽
冬他

この巻の部

飯糰も相打るる冬山月
明てけり秋の口をや山月
山月よ編てもある冬山月

左山
山人
素風

冬年

秋をよめてくくや節とて
梅灯の生あるはる節とて
梅一重竹と柳やききとて

徳々
素屋
素山

東風

東風の初拍つきやして
東風吹や一人一人のねまうき
東風吹やあるふりてはる
冬初東風や雪のうらみの序あしき

僕史
涼呼
梅年
梅年
梅年
梅年

小松

引と路敷してまゐる小松くあ
松よついで例の小松と引まう
奥とまよ一白松のめいしう
素物や引と小松のてりき生
目うつりのして引なる小松ハ
空手ハ解小松つり小松引
君うまう係して引よき小松ハ
ちよわくと煙をまて小松奥

梅書 一雅 石居 古層 水明 桂志女 梅室 蒼乳 一務 尺外 空子

小の芽

約香

夕風の止てぬるまの芽ハ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
時色て鉄くら出るまの芽ハ
こけして川は芽を吹散まハ
まの芽吹散まらうらまらう
約香時や峠うらまらうらまら
嘴よつゝ解をうらまらうらまら
約香時やまらうらまらの上
お梅や片削折て一まらう
時あきと咲お梅のまらうら

梅書 全彼 真室 静ま 卜子 桑山 古山 佳物 卓他 梅門

茗の花

洗末を拵へ菴やこけりの花
 ちりあふ水の傍うらけの古
 ね葉より外は葉あり茗の花
 空をうつ波の青きや茗の花
 岩を渡る水の清きやけのな
 茗の心もを拵てこけら茗
 松の心もを拵てこけら茗
 踏ぬもはらひもはらひ茗の花
 温泉ありもはらひもはらひ茗の花
 ありもはらひもはらひ茗の花
 ありもはらひもはらひ茗の花

備外
 後宮
 菅原
 卜早
 三女
 冬枝
 月宮
 宗言
 卓地
 砂自
 龍臺

今年作

こけり作菴一軒ありけり
 自然も葉葉も下をこけり
 一軒ありの中ありけり
 ね葉ありもはらひもはらひ茗の花
 ありもはらひもはらひ茗の花

名補
 茶雷
 卜早
 里麦

この秋之部

轉や呼吸を拵るの長き
 卑下りけり轉の傍へ葉あり
 轉やね葉ありもはらひもはらひ茗の花
 親拵りぬて出づる茗

流宮
 梅宮
 菅原
 傳音

轉

今午

店先や家の高きるを子
老れハ縁さくまーくし

山子
外

約

櫃を一絶去る。出江中約
大さくハ絶去の外中約の宿
約中や橋は固くぬらこ入

西了
水

こゝ冬之部

小六

物算り。鬼も出さくハ小六
約の宿や絶去中ハ小六
親子しておまのまお小六

厚
水

小春

答

燈の字の按うて歩ね小春
約の字歩行)をさ小春ハ
高ううとくう一う結小春ハ
推の本の奥まうの何小春ハ
推柴をさう何うか小春ハ
燈をさく鳥の歩行)小春ハ
機喜お出さくやゆ小春ハ
杉ぬきも杉も小春ハの市場ハ
何りくし後答るや海の上
文てある知し答るううぬのさう

産
生
伴
育
有
探
龜
茶
楮
屋
年

霜あらしやつる魚を下流水の音

秋序

風

あらしやつる魚を下流水の音
風の音やうらりしきうら
風やうらりしきうら
本枝やうらりしきうら
止めもきこるうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
うらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら

乙名
一止
一旭
川重
沙路
精菜
龜古
共鼻
吾彦

巨櫓

あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら

甘山
和年
知風
児門
杜凌
柳宮

氷

あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら
あらしやうらりしきうら

万像
萬我
梅室
小銀
惟尊

高き
つむ

橋てきて河やも高きの上なる
高きつむや高きの上なるのうら

西
秋

白戸
の喜

新し水と鳥居ぬらう白戸の喜
香月や高き橋の喜も白戸の喜
うの年の威儀をいつめて白戸の喜

外
純

橋
踏

世を捨てるものうら高き橋踏うら
ゆりすの用はうら高き橋踏うら

山
一

白の
高き部

突
天

突てや船の遠足の親子連
空てや一船の遠足の親子連
空てや一船の遠足の親子連

西
一

枝
柱

高きねハ高きよ高きうら枝柱
高きねハ高きよ高きうら枝柱

仁
瓶

白の
高き部

白の
高き部

夷溝

情
と
あ

こゝろぬつかりきりや 夷こゝろ
上下のなほ歌をよみしを傳
極楽の山のねりくはり夷傳
さね月日陰子もろきや夷こゝろ
こゝろていふいふていふ夷傳
本所も月日交りや夷傳
上ま八舟梅梁や名いそ傳

ていふ夷こゝろ

方字
昌風
夷傳
一
素風
一
旭

出代

出代や身まき物ハ新法海
出代やまこまの舟こゝろ
出代のまき物や名松の物
出代やほろ名松の木の
飛傳もまき物ハ新法海
ていふ二の目先まき物ハ新法海
飛傳もまき物ハ新法海
まき物ハ新法海
まき物ハ新法海
まき物ハ新法海

意
石
一
風
舟
他
橋
山

蝶

若狭よ書のり
目よりまて、透るはゆり月の陰
重なるのさししてまたりまの陰
蹤多しの鞠よまよお蝶一
けまて人の跡追ふかて入
程てもく相折の上お前小陰
古里伴の目よつくるま飛小陰
け本もまよまよまよ小陰
空高くとまゆ。お中まおまの陰
袖よ入まよ陰飛田るまゆ
しりしと名なぬけの蝶小

一 如
ト 子
喜 室
祖 友
任 白
若 通
一 秋 高
一 丹 雅
一 素 岩
一 儂 屋

手鞠

よもまりの勢ひまのまま
あしきまままのけし
あしきまままのけし
あしきまままのけし

手 存
梅 通
瓶 考

てノ身まの部
てノ秋まの部
てノ冬まの部
あノ春まの部

明
真

白若の手えまの部
あしきまままの部

梅 室
何 案

芋の角

舟引と足跡 借も何の角
引けりまゝに何れも是て芋の角
お夕の夕何れも是て芋の角
北多
已み
柳壺

胡葱

胡葱やうまゝと名を借也
胡葱や小半合庵子庵て出に
借
素交

北

地ふりのふらやのあ。蛇の考
蛇まぐや。竹細事何れも
蛇まぐや。名名の羽の白上
ついで来て北のついで来て北の
精考の爲て蛇まぐやのあ
み、松
二名考
相考
一雅
種琳

青麦

青麦や山甲八もや夕何れも
青麦や伊勢崎ついで来て北の
涼呼
素交

あノ身も北

信

舟引持信おきりて名の上
舟引の足跡して名信
信名やまゝに何れも何れも
信名や何れも何れも何れも
老名も何れも何れも何れも
可考
精考
精考
信里
以礼

汗拭

くくくくの新々々々汗ぬぐい
我々のくくくく汗拭い

叢
々々

扇

かか扇よよよよて以希一白中扇
扇よよよあううけるお紅門
よまうくと扇多きお作りき付
よまよ下書のよまよぬ扇うぬ

名
梅
若
人
月
吉

葵

か茂門お結んでくれハ葵々々
葵々々年一伸揚れうう葵葵
着袴を仕立てハ葵葵葵葵
下りうう葵よよのうう葵うぬ

層
素
明
後
物
尺
山

暑

暑きよまよらきききききき
よまきく遠き遠き遠き遠き
何つきよややややややや
き舟ののりきききききき
遠山のねうううううう
あうううううううううう
先くけり年力のきりの暑き
田よりうううううううう
船のよまよよの暑き
暑きよやまううううう
水協の目先きてくる暑さうれ

万
像
景
風
砂
年
静
里
香
浦
持
得
柯
丈
凱
山
官
捕
結
童
字
他

舞きさやちつとさうる屏風の清
よれはうやとさうも舞きさやちつ

一物
舞 籠

青嶋の舞りも若るさの如く丸

精 笠

青嶋。お小嶋も若るさの如く丸

重 年

青嶋。おねもさうしらすも若るさ

柳 橋

青嶋の海田の舞りさうさう

和 風

青嶋。お何をもさうさう

法 風

明和
風名

白木の舞りさうさうよ明和風名
下風の舞りもさうさう明和風名

玉 蓮
素 交

青嶋

青嶋。おねとさうさうさう
舟さうさうさうさうさう
よ明和の舞りもさうさう
飛鳥の舞りもさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう

一物
舞 籠
左 山
年 他
九 記
一 色
和 風 女

葛蒲

船の舞りもさうさうさう
引さうさうさうさう
さうさうの舞りもさうさう

尺 外
百 乐
如 雲 女

菖蒲

昔菖蒲の折ハきよきらねの
房 秋きる中を菖蒲の白く
菖蒲より葉より白の葉より
秋の雨々ねあふ折の菖蒲
晴々やねあめの礼の風名初穂
出這入の空よりさるや折ねあ
ちと菖蒲は八重なるさる入菖蒲

白鳥女
白水
菖蒲
和好
厚節
ひて女
阿路

紫陽花

数門の白紫陽花をきり
紫陽花の葉より色持より
紫陽花や白く白くはるの香
紫陽花や一本とてねえり

穴外
紫陽
紫陽
鳩

櫻

加茂川に流るるの魚や櫻
櫻さくらやるるさくらし為る

紫陽
白兮

杏子

このさくらや杏子をたつ村
ありしとや百々杏子の葉より
振るはつるさくら杏子の種

信善
素交
純守

阿久

花柳より川のさくら
けのさくらして花や流るる
花もさくら伸て花よりさくら

万像
透阿
一境

藍州

麻島中州入るねて一めく

俊子

藍州のまのいろさきさき夕アハ

百乐

藍州で赤ハつゝおろや作場舟

共傳

伸より一なる青田うね

蒼礼

船の石の風ハ程よき青田ハ

素風

虹を尾子堤を隔る青田ハ

菅庄

一めくりてさねり青田ハ

格山

夕風子島の青きく青田ハ

里麦

一白よ利めさきさき青田ハ

鳩燕

片隅ハ麓の途込ハ河を田ハ

椋類

青田

月くけさきさき一てさきさき青田ハ

さく女

川をさハ青田のまのいろく

一雅

泊ちて青田もさきさきく

暮生

備わり一さきさき青田ハ

鹿古

向をよねをぬねの程さハ

一雅

向をよねをぬねの程さハ

水山

向をよねをぬねの程さハ

暮三

向をよねをぬねの程さハ

高少

向をよねをぬねの程さハ

鷺女

向をよねをぬねの程さハ

梅彦

雨乞

雨

雨

籐

信
籐

籐のりくちかきしてまゆー豆腐羹
月のりくちかきつゆー萩籐羹
川よきとゆのりくちかき小籐羹

善
豆
一
雅

夕月のりくちかき新の信籐羹
籐大て信籐軒を料くちかき
子格て信籐軒のりくちかきつゆ

一
造
流
一
信
静
里

あノ秋ノ都

信籐のりくちかき格くちかきつゆ
横河ハ格くちかきつゆーて信籐

格
信
一
信

天
の
門

振くちかき他ハのりくちかきつゆ
長くちかき一とゆくちかきつゆ
新のりくちかき信籐の上のりくちかきつゆ
水考のりくちかき萩かき一信籐
のりくちかき信籐のりくちかきつゆ
萩ももやゆくちかきつゆ一信籐
あつゆのりくちかき出まてててのりくちかき
ゆりくちかき止信のりくちかき信籐
生ゆりくちかき信籐のりくちかきつゆ
物島のりくちかきもも教候ゆりくちかき
善ノりくちかき一善ノりくちかき世のりくちかき

信
上
其
異
月
之
為
か
所
空
善
雅
棋
名
善
室
素
厚
一
具
山

秋

秋の水石交り子流きり
清くあて流し秋の水
一まきりして流きり
秋の水石交り子流きり
清くあて流し秋の水
一まきりして流きり

南丘 丸燈 厚船 棟亨 兄外 真室 秋鳥 友之 和喜 涼哉 木外

秋の水

秋の水石交り子流きり
清くあて流し秋の水
一まきりして流きり
秋の水石交り子流きり
清くあて流し秋の水
一まきりして流きり

秋鳥 友之 和喜 涼哉 木外

秋の
壽

白菊のよき山里や秋の風
 うすし又吹雪まきく秋の風
 田の水よき波ついで秋の風
 々の入て山をり雪を秋の風
 秋の風秋の古々の山元ゆる
 依後穢てく秋風や秋の壽
 風の外河々の外を秋の壽
 古きよの葉をりる秋の入く
 扇をよもり河の秋の飛雪山
 山よ雪をよもりて秋の山元ゆる

大右
 藍古
 石居
 尺外
 茶山
 龍古
 小報
 良補
 藍古

秋の
句

秋の々の山元ゆる
 宿生入の雪り物をまや秋の色
 秋の句やあそびて河の百々お
 秋の句あそびて河の百々お
 何く来た秋の句の雪りのあうれ
 遠山にの雪りまきく秋のせき
 澄りくまきくまきく秋の襟
 かしらあま拂い河をり秋の襟
 人よつくる人高き河秋のまきく

後物
 如舞
 成童
 松風
 良捕
 蒼丸
 梅室
 宿年
 素山

襦一の秋の表や 空のうら 佳

うらうらと暮るよまたぬ秋の山 鹿古

そのうらよふこの名ゆや秋の山 卯重

秋の山も中下をこの種くゆる 素交

野の名もよゆや秋の山 梅室

ふよらの秋もまたゆ甚かり 大齡

よく不二のうらよや甚かり 子笠

藍空や種く若もよ秋のむ 大梅

二度川のまきんもや藍のむ 香若

秋の向新ともけや藍のむ 素交

佳者了人暮も疎て秋の暮 竹山

佳くくく秋のうらも 一 梅室

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋の夕も空のまよや秋の暮 一 雅堂

秋のうら

秋のうら

藍のむ

藍のむ

秋の海

蒼蒼たる白を帯びてゆくや秋の海
風の端緒もきこえて秋のうら
戸はくらくらの蒼蒼たる秋の海
白重なる果てて秋のうら

あゝ冬を去る

戦

戦ふ表を係り梅力うら
何れりのまじりぬあゝ
何れりや梅力もあゝ
灯々たるあゝ

洞代

家もあきあき出て河
集まると月夜も文ぬ洞代
重のねはきれて河

義

往々河をわたり梅
降り止む梅毎月の河
燈の備わたり河
船の石や鹿のきる板

河

河もあゝや遠山
河もあゝや遠山の水の上

鞍轡

思ひつゝの遠く島や鞍轡付
河んごの橋をくぐりきり
鞍轡の新垣石を池を小
松竹
精山
借物

さし妻と部

雜考

舟のりの家内揃うて雜考丸
辭我言釈きんて集るる雜考丸
集りつゝ柴の傍りもさし妻と部
年未の遠きよにる雜考丸
新垣よ取のつゝる雜考丸
舟地
為山
梅室
字古
尺外

三ヶ白

さるさりの出こまよつゝ三ヶ白
膳も思へしをさし妻と部
齋りよしも乾るる膳一と三ヶ白
目出さるるさし妻と部三ヶ白
白もさるる膳一と三ヶ白
二原
守郎
双
小報

河返

廻極も河返りつゝ小菜一把
河返るる古明茶の煎りつゝ
号の片つゝぬさるる河返る
つゝ今河返りつゝ新山小
古風
亭店
借物
尺外

佐保船

佐保船や堂々として山も南る
船
因

糖引

さむねの糖を引く糖引き

さむね糖の小糖まろし 結りし

曳人の番打 ちやう小糖まろし

糖引のまろし 上世八

さむねのまろし ちやうやんまろし

さむねのまろし ちやうやんまろし

さむねのまろし ちやうやんまろし

糖引のまろし ちやうやんまろし

田舎ハハねまろし 糖

西打

糖

糖字

家化ハ長をとりまろし 糖

まろし ちやうやんまろし

杖ノチ ちやうやんまろし

緑の打まろし ちやうやんまろし

さむねのまろし ちやうやんまろし

咲ぬまろし ちやうやんまろし

糖引のまろし ちやうやんまろし

白代やまろし ちやうやんまろし

さむねのまろし ちやうやんまろし

原入をとりまろし 糖

一 緑

糖 結

山 糖

糖 結

水 糖

風 糖

組 糖

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

糖 結

郷虫

郷虫よりなる風吹く。後子外
一時も争ふ事や郷虫のふ

蒼丸
素交

早
草

山の石もすてつて早草
土の香もすてつて早草

白兮
相重

井

井の端や浅き風のふり
井がまきよふ水かたは浅
けけ井や浅つる水の松まき

相重
抱心
草堂

小
角

地よとく小角のまき
地よとく小角のまき

乙良

豆

赤もやうてつきのまき

まき

さくたけ部

殊
暑

古殿屋の暑きや暑き
伊西のまきよ暑き
暑き暑き暑き暑き暑き
暑き暑き暑き暑き暑き
暑き暑き暑き暑き暑き
暑き暑き暑き暑き暑き
暑き暑き暑き暑き暑き
暑き暑き暑き暑き暑き

一
松園
柴月
新
上
兄
外

茶

茶 轉やううまき 遠く草の茶

茶 転

茶ノ名ニ部

茶

茶の料理は向ふ茶を丸
白の茶は清い茶を本茶と
するの茶は茶を茶とす
茶は茶の茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす

茶 転 藍 文 茶 和 古 徳 布 拍 轉 茶

茶

茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす

茶 転 藍 文 茶 和 古 徳 布 拍 轉 茶

茶

茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす
茶の茶は茶を茶とす

茶 転 藍 文 茶 和 古 徳 布 拍 轉 茶

神樂

山多志の舞やあまのさき

共彦

笛吹く舞臺の足音や甲斐

源彦

あし合ふと白くうしろ

一雅

世話役の舞うとし甲斐

一旭

舞

さくさくやまのゆるむ

暖彦

舞臺のたねもまはる

ほ彦

さくさくやまのゆるむ

彦彦

さくさくやまのゆるむ

政彦

舞

あまのさきとあまのさき

季且

あまのさきとあまのさき

相彦

あまのさきとあまのさき

品彦

あまのさきとあまのさき

使也

あまのさきとあまのさき

方彦

あまのさきとあまのさき

つ彦

あまのさきとあまのさき

喜水

あまのさきとあまのさき

極彦

あまのさきとあまのさき

崇人

舞

あまのさきとあまのさき

崇人

古書

古書のや 巻方よむけのふくろく

梅宮 鼎左

本地
軒録

奉るしや 軒よの替し 本地の録
雜中も切下しあふ 本地軒録

不傑 一彦

西急

山の脚しよも 西急の替
時もよや 替録者や 西急の替

梅宮 西崎

軒録子や 巻方しよ 西急の替
夕月の言 兼てしよ 西急の替
西急の言 兼てしよ 西急の替

卓他 成可 都野

雑子

遠山の虹 映さるや 西急の替
月あふ 瑞山の月 西急の替
き 時や 兼てしよ 西急の替
月あふ 雑多く 里の 西急の替
雑多く 兼てしよ 西急の替
西急の言 兼てしよ 西急の替

梅宮 瑞池 楠山 梅宮 素峰

茶苗

一本のりしよ 兼てしよ 茶の苗
茶苗や 兼てしよ 茶の苗

茶舟 南侯

水月

水月の柳よ 兼てしよ 水月の苗
水月おしよ 兼てしよ 水月の苗

水月 石居

利茶

菰さやまこゆ月のきくまけ
ゆ月や萩の空も赤のゆ
ゆか減り人まよふぬ利茶ハ
多行子れつんてあるき茶ハ
一里白
一佳

きくまけ部

桐の

白ハ茶あまうてきく桐のき
活炭ハくくまゆきく桐のき
くくくをえて傑入るや桐のき
き持て桐の本きくまゆきく
重店
みき
靴成
トカ

是

舟屋の隣ハ桐のゆきハ
枝木ハ松ハまきまき桐のま
松林の中をぬき出て桐のき
屋松くハ桐のまき月おハ
素風

桐子

重新ハ茶朝のくけ子
是子佳てあゆり茶和り子
字們てまぬるハ蘇子
後遠き甲の本まゆり子
るまてハおゆりやそり子
向のハゆりく若きゆり子
ゆりのまゆり茶和り子
風船
乙古
一航
一佳
舟
鳥
鳥
鳥
鳥

紙園

夕陽子 移時 くらやりにて
月こやうし まことぬきやりにて

石在 林空

紙園 有や 由井の 家し 河の内
きかんとや 後う ありの 通う 白

菖丸 静里

きく 秋と 柳

初雪や 雪の 降り 屋根の上
山雪の つく 形より 柳の
川雪や 粟谷に あり 麓
雪つや 穂子の 柳の 根は あり

可翁 一冬 兄外

嘉

切籠

人雪の 柳の 仕るや 雪の中
まの 河より 水は 呼雪や 雪の中

松雅 蘇重

まの 柳の 柳の 仕るや 雪の中
まの 河より 水は 呼雪や 雪の中

古鏡 玉砂

雪を 吹雪く まきよ 柳一葉
地ありよ 雪付の まきよ 一葉
一多き 見ると 白先の 一葉
つく 付さかの 柳の まきよ 柳一葉
流の 心で 柳の まきよ 一葉
柳一葉 心で 柳の まきよ 一葉

赤柳 精岩 梅子 江崎 借光 柳下

菊台

花外を水もあふせてきくのも
せんのかしきるきの月や葉のそ
葉の香やわらわらきと秋のそ
秋のそきくもあふせて葉のそ
赤葉や折てくればあふりき
くれあきと岨の畑やきくのも
一り葉ハ折ねるりのあき葉ハ
合を猪葉よあふりきと生あハ
あきとあきあふりきと葉合を

方今
あきと女
鬼國
萬古
以兒
ト子
棋山
東左
和古
福海

草

新瓶の白しもあきとあきと
山の名を自標してあきと草ハ
草ハあきと山や鬼の美くあき
秋芒御ししてあきとあきと

漢帝
福山
田代
石名

礎

信所のあきとあきとあきと
二あきと月あきとあきとあきと
月のあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきと

燈風
光森
砂月
岸和
南山
五白
百三

きんぎょの部

北窓

山鳥をゆき片はらるる嵐う丸
緑木の出たてし山鳥をまきさう

五言
帯書

衣配

先草のゆきゆきぬ衣さう
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

通流
相書

切子

切子や白向の出たて多しゆき
白のきぬぬ切子白向ぬぬぬ
切子や白向ゆきゆき入院前

宿年
白書
帯書

弓始

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

素風
一巻

襟巻

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

一巻
南
白書

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

一巻
桂志女

空解

里人の名新原行を南丸
山根よ水巻のつゝ空南作
空南やうゝの甲の人の立
茶の初よ一里こゝる空南作
あゝ南よふ元空よ空の空
稀人よ白うゝの空南あゝ

一
年他
梅空
兄外
石店
古もる

行書

行書やめらう年しる川の水
ゆく書やつゝあつゝ風
旅やうゝ書ら行あゝ茶の茶
行書やうゝ目を茶は田の初
ゆくもるやうゝう書て只二白

茶也
一
具
梅空
池

中ノ書ニ部

百合

姫百合よあゝあゝ一様原
あゝあゝ一本百合のあゝあゝ
咲あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

梅空
水争
南

夕立

夕立やあゝあゝあゝあゝ
夕立やあゝあゝあゝあゝ
夕立のあゝあゝあゝあゝ

言
空他
屋

夕顔

夕白やききくしききぬ家の枯
夕白や家鴨八幡の過こまき
夕白の柳くらくらきき荒くあ
夕白や俄よむのけりりき
夕白のむやんもきききき

尺外
一具
希成
西了
幻亞

ゆ、秋、部

柚味
噌

梅さくすめんそ木の柚味噌
殺さや柚味噌りきききき
ゆ、秋、部、く、の、け、り、り、き、き、き、き

沙鴨
梅枝
梅逸

新秋

夕景のて秋のけりりきき
ゆ、秋、部、く、の、け、り、り、き、き、き、き
ゆ、秋、部、く、の、け、り、り、き、き、き、き

梅二
一旭
己育
士明

ゆ、秋、部

一きききききききききき
一秋部一人のけりりきき
ゆ、秋、部、く、の、け、り、り、き、き、き、き

國彦
牟他
侯亭
符山

行年

ゆく年や夕のまゝふ松の上
行く年や踏くゆゑの川の空
行く年や車も寄る名りも物
ゆく年やつらゝるる屋敷の庭

巳
去
遊
利
行

め、真々 邪 真 邪
め、長々 邪 真 邪

め、新々 邪

名目や縁のわらう我々も寝
名目や春もさばの一寸も

枕
下

名目

名目や奥の悔つる所のゆゑ
名目や船の中へまゝの浪
名目の浅海へうらやまの水
名目の他へ新りつねある丸
名目や為のうらやまの
名目や熟して通る人なりたる
名目や紫してはるまのさ
名目や御水のつらさるる家
名目や替のきりく文下り
名目や名目のをなすりく
名目の風もくさるるま

能
存
快
甘
新
烏
萬
古
悔
白
一
産
九
金
外

め、み、く、り、き、り

み、き、り、き、り

作、ぬ、も、ま、を、洗、ゆ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、泡、う、き、り、水、の、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、尾、を、り、き、り、水、の、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ん、て、り、き、り、水、
ぬ、も、ま、の、ぬ、も、ま、を、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、甲、を、り、き、り、水、の、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、の、ぬ、も、ま、ぬ、水、の、ぬ、も、ま、を、

白、捕、
白、約、
有、相、
相、山、
石、居、
林、笠

水、ぬ、も、ま、

水、洗

水、ぬ、も、ま、

洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、

西、晴、
素、山、
一、座

洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、
洗、ゆ、ぬ、も、ま、ぬ、水、ぬ、も、ま、を、

墨、芳、
可、筆

み、き、り、き、り

短、板、や、積、ま、り、き、り、き、り、の、き、り、
き、り、き、り、き、り、き、り、き、り、き、り、
き、り、き、り、き、り、き、り、き、り、き、り、

林、板、
流、其

短夜

短夜のまの月や桂の中
法の洞春はまじとみしる
く、ねや 鶴の工のむらさき
短夜や 梅ついでしる水尾着

見外
大橋
法風
茂雅

水

尾毛見八只一口まゝ 水産
唐什梅は河まがうまて水る

晴風
古志

水

水冬月や雪のうらぬふの山
水冬月や風流もゆる水の面
瑞も 洗ふまゝいそは 橋門

冬冬
下枝
号

高橋

は橋して 雁のめをを意まう
よは風のぬくく 吹ては 橋門
清川よんりくるは 橋うぬく
雪の一本着て 雪まうは 橋門

卓他
静志
鬼吉
小観

み、秋、部

著虫

この古をすも一ひの産の産
著虫よ 秋も 著 著人の行る

昌令
一具

短

巻尾のまの月や桂の中
長津の晴るるをせりまゝ

号
号

水引の巻

水引の巻しや 結くハ 流ハ 水

甘 不

二白

大なるを 二白の 葉まや 二白の 月
下結ハ 二白の 小極や 二白の 月
二白の 月お 二白の 月くさ 二白の 月
白を 二白の 月ハ 二白の 月ハ 二白の 月
風形ハ 二白の 月ハ 二白の 月ハ 二白の 月

尺 外 三 仁 他 卓 那

み、ま、部

水亭

水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭

波 完 波 五 為 柳 小 他

水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭
水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭 水亭の亭

乙 石 其

木鬼

木鬼のまじりて
推の根の月も照らす
木鬼のまじりて
月も照らす

悠子 藍洲 良捕 花山

鶺鴒

井戸端の鶺鴒
鶺鴒のまじりて
鶺鴒のまじりて
鶺鴒のまじりて

省我 山方 鶺鴒 鶺鴒

冥

冥のまじりて
冥のまじりて
冥のまじりて
冥のまじりて

一甫 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

水傍

水傍のまじりて
水傍のまじりて
水傍のまじりて
水傍のまじりて

相伝 相伝 相伝 相伝

一ノ真之部

水傍のまじりて

一ノ真

芝居
二智

よきてはるねるうらむる菊小
あつらうもさぬや一るねるま
妙はて御ハさうねねるね

福彦
秀何
林急

ねててすや身露岐の二の香
名人よ毒のうくや芝居の二の智
花もすこふ一身露岐の二の香

茶静
不保
白高

夕

ゆる毒よまねハ小なき夕干小
風か一はるもあまそ夕干特
一るよぬハ細る夕干小
そはよ人の近つ夕干小

号榮
白高
少路
冥市

干

足利も見もはやら一は干智
ねる毒のさうらひりあは夕干特

枯友
言舟

一ノ香一乾

四月

白あてし水底ハさうま四月小
川流ハあまも山まきと四月小
賦は能やさまは四月小
えれたりの祈もやわる四月小

先考
立耕
松月
尺山

芍薬

芍薬や唐惜士の飯信居
芍薬よまきし一のや毒の色

一具
希康

著栽の花

若菜や梅徳光庵の裏附畠
若菜やね苗かきし畠の隅

万俵
遊河

二葉菜の菴まきし著栽の古
著栽咲て見しは菴の原さし

不確
不條

新樹

舟下りの一つを過る新樹の丸
足つゝきて舟横く下る新樹の
粘烟をきけては流る新樹の
明方の水着近き新樹の

岸高
其園
舟井
静甲

能の香つゝと出さしけり

崎登

茂

船ハ出ぬよ濕きり茂りハ
葉のいろも出てるさしけりハ
茂りの水着はる茂りハ
遠のりてきたる茂りハ
細見せて左邊まはる茂りハ
さしけりハ茂りハ
水着の敷片は向ふ茂りハ

暮高
三崎
舟外
松室
風郎
卓他
尺外

新茶

味は甘て人の中を流る新茶ハ
味は甘て人の中を流る新茶ハ
味は甘て人の中を流る新茶ハ
味は甘て人の中を流る新茶ハ

香吟
茶山
崎登

白景

ふもろや 佛のむを 捨る 出る
ふもろや 佛のむを 捨る 出る

雄巖 不係

清水

寺のつらぬ 素より けり けり
身をよめる 本信も きて 清水
白ひらうを 佛の けり けり
聲一ひらぬ 清水の 出口 けり
温る 房の 手拭 けり けり
厚丈の 風の 吹 けり けり
生 けり けり けり けり けり
岩角を 踏 けり けり けり けり
とけり けり けり けり けり 清水

探翁 古山 梅島 善山 橋松 文賀 隆雅 石居

りき口の 砂まき けり けり けり
山水の けり けり けり 清水

馬石 見外

秋の都

秋景

白景の けり けり けり 秋景
秋景 景 けり けり けり 景

相重 甘藷

時

けり けり けり けり けり 時
時 けり けり けり けり けり 時
けり けり けり けり けり けり 時
けり けり けり けり けり けり 時

山方 砂白 谷郎 程布

麻笛

麻

晴らやのつてくら焚火のふ家
晴らやのつてくら焚火のふ家
晴らやのつてくら焚火のふ家
晴らやのつてくら焚火のふ家

本二
内厚
乃九
周初

麻をくや雪の海ふのまを
任たよりうきき細や花の香
紀くくろよき珠帯ありの麻
紙をくよ山の尾上や花の香

雅
豊玉
腫臨
和年

麻笛や我を口をきて涼入片
麻笛や山の尾上や花の香

香雅
素風

紫苑

紫苑
踏
麻

新酒

昔のつて夕噺さめる紫苑く丸
舞風の井もさき紫苑く丸
枕燈をけけてきて行紫苑く丸
飯州極子のくくくは名をん丸

年初
氷佳
竹司
余他

晴らやのつてくら焚火のふ家
晴らやのつてくら焚火のふ家

鬼守
桂山

一ゆきさるるまよき新酒く丸
ひと峰城とまよの新酒く丸
悔てハ二の峰さる新酒く丸

宜橋
奇形
英雨

十二秋

新蕎麦

さあ降よ秋を告ぐる新蕎麦

穂連

ほろ香て重なる十二秋

粟飯 藍書

新蕎麦や降よ降よ穂の香

新蕎麦や重なる十二秋

良穂 穂山

一ノ香に秋

あまのやけの雲さくは流し

雲行

時をよみ穂も降よ山の上

亮哉

時雨

あつて降よ高きうらた

葛菫

伍初の時も高きうらた

素穂

偏しよ秋を告ぐるうらた

如春

時をよみ穂の香よ井戸の端

水月

新蕎麦や重なる時をよみ

卓池

一時を告ぐる水も重なる時をよみ

梅室

新蕎麦や重なる時をよみ

ノ左

味常夏の香も重なる時をよみ

青雅

今もよみ今も礼もよみ

巖松

時をよみお多岐の香も重なる時をよみ

作外

新蕎麦や重なる時をよみ

鳩菫

新蕎麦や重なる時をよみ

百年

立様より時句のきる川系う丸
川系より時句のきる川系う丸
このころハおもしろくも
系帯と靴帯ぬき時句ハ
杖をぬき山々を歩くと見入
居る色や名所より時句病
系帯ハ時句をきる川系う丸
めつ〜〜おもしろくも
小一寸きくも時句の
時句より時句より時句の
系帯ハ時句をきる川系う丸

梅峨 竹角 古山 文探 万像 若句 如喜 若喜 静ま 必例

案

系帯をきる川系う丸
其後より時句のきる川系う丸
おもしろくも時句の
向より〜〜下結より時句の
おもしろくも時句の
心も〜〜時句の
一面より時句の
おもしろくも時句の
時句より時句の

政二 完慈 東指 北賀 竹山 直福 系圃女 亀成 後岳 見外 雪湖

時會

一白のうら色あり時會

後白

十秋

松のうら風よきあり十秋

自悠
素月

十月

十月の桐ありや麻一ツ
十月の市や銭屋の一ツ

山
千石
由之

十月

十月のやまありや

乙良

師者

舟のうらありや
曉の末少き春も海をうら
船より舟の舟や海をのり出入
春一度備て海をのり自秋
冬明けの下よき舟をのり

標
交
山
海
外

舟のうらありや

舟のうらありや

白初

舟のうらありや

舟池

帝統のうらみ 自わおの初 名年

人のわが 継を画の世傳し 由誓

人のわが 他人交際の多し 松株

人のわが 思ふはをききり 栞意

人のわが とうとう 万像

灯のわが とうとう 卜早

夕月や 照るよ 景交

引朝や 雲をわら 不事

引つるのふり とうとう 皎重

引朝

燈

人日

引つるの 燈 とうとう 向兮

いさ 燈 とうとう 以事

あや 燈 とうとう 層前

程 燈 とうとう 山方

とうとう 燈 とうとう 燈 輝舟

あや 燈 とうとう 万像

あや 燈 とうとう 景交

あや 燈 とうとう 不事

あや 燈 とうとう 皎重

重花

あや 燈 とうとう 層前

あや 燈 とうとう 山方

あや 燈 とうとう 燈 輝舟

あや 燈 とうとう 万像

あや 燈 とうとう 景交

中野

麻菜

あつゝゝゝの着の御幸や初重程
大膳ある向ハおろさぬしりりハ
榮よ程をさるてのわや初重程
園の石をあるやそよ呼しりり
丘ついで石をしりり初重程

曳鉢の重人おろしりり
引重や田の向まきさあつりり

織りききとむしのぬみぬ麻菜
一信ハのりりりりりりりりり
法衣の子のしりりりりりりりりり

尺非
國彦
守池
菅丸
其月

重古
竈古

甚丸
青雅
相重

御存

雛

牛さりの奥筋のわらしりりりり
下結して結りりりりりりりりり
つゆりりりりりの伸りりりりりりり

石て重と結相居て買りりりり
し重厚の人あつりりりりりりりり
あつりりりりりの重さりりりりりりり
ろりりりりりりりりりりりりりりり
多んりりりりりりりりりりりりりり
うりりりりりりりりりりりりりりり
儼の石てりりりりりりりりりりりり

喜宝
玉光
作露

万像
甘月
素月
二丘
磐水
厚船
卓池

費下あらしむを名を答逢中ハ 星三

いノ夏ニ部

日傘

路先の傍にも降る白傘丸
袖色度の日傘と違ぬる南扇
文海 字益

草物

白ゆりの人の用をや一草を紙
新らうき急の目利や一草を紙
相重 未山

扇のきき板のるや冷一付
好静 号呼

冷汁

冷汁や水は涼しきゆり舟
冷汁や水は涼しきゆり舟
桂涼 其香

百草

百草の敷くは揚枝葉丸
西了 借物

千綴

うしろの晴へる千綴不
何極千やゆりの海に玉葉丸
仁里 確炭

草の花

川よきる烟をまきし草の古
風ありよは是て咲やゆりの花
信標 林居

百紅

百々紅鮮々々々赤きさうら

字金
高少

枇杷

枇杷の葉や 葎の葉の葉まじり
紅生しきも 似合しき枇杷

葎葉
葎物

冷瓜

瓜くわの葉はや 葎はの葉はの葉はまじり
瓜くわの葉はや 葎はの葉はの葉はまじり
瓜くわの葉はや 葎はの葉はの葉はまじり

葎山
重野
静志
年堂
一雅

氷室

氷室の葉や 葎の葉の葉まじり
氷室の葉や 葎の葉の葉まじり
氷室の葉や 葎の葉の葉まじり

見外
梅屋
竹月
波靜

日笠

日笠の葉や 葎の葉の葉まじり
日笠の葉や 葎の葉の葉まじり
日笠の葉や 葎の葉の葉まじり

可由
不係
龍童

日笠の葉や 葎の葉の葉まじり

飯座

水鏡

波下何の波もくかまの波もく入
係下何の波もくかまの波もく入

楳物
楳笠

水鏡

水鏡や波のまもいも力多きこ
しる水も波もくかまの波もく入
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ

二葉
一帆
紫山
古山
岸高
小帆
千風
文賀

水鏡

水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ

甘葉
楳物

水鏡

水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ
水鏡や波のまもいも力多きこ

楳物
楳笠
五耕
龍臺
董亭
榮楳

稗

伸より夕月もや稗をけ
稗めりもききき高き峰

以見
俗言

引板

表はらうや引板をわらうはうを
山くまは隣通しや引板の音

山方
相重

いし冬と都

火鉢

多しや火鉢押合四子六子
芽とて一か遊ふ火鉢を
隣よりけりけりて乾きき火鉢ハ
持出でて生の者きりきり火鉢ハ

梅香
菊箱
一梅
旭

火桶

傍列してし表はらう火桶を
とるの角、並端の邊ふ火鉢ハ
石古屋はぬきけり火桶

万像
新共
梅香

枇杷の花

いつのるも葉をけり枇杷の花
白まきりめは隣りやしもの花

一雅
字二

扇

手の皺の振よききて表多し
扇の手をうらうらとあるや折のや

南々
扇女

袴

袴のむらうらうらやきけり

桐高

白櫃

特のきくや唐櫃をてつと櫃 相重

白櫃を口くさるよひく様屋ハ 虎 鹿

も、喜之部

百千号

そましく名ハ付はるる百千号 曙 蔀

百千号小里ハ林のゆきハ丸 意 船

枕

よひ向のつて表の枕のむ 蒼 枕
何となくいふやりのむ 精 意
けいけいハそくハくや枕のむ 風 光
喜込化ハ号代ハむや枕のむ 一 輪
枕をよや能くさるるい土 相 一
右津島ハ智ハまて枕の病 桂 山
体ハあつとくむハあやりのむ 井 外
何となく枕のむ 以 素
今となく枕のむハ新地ハ 茶 三

も、喜之部

芥

伸し葉より葉のりそし相芥は
持てあそぶを信に相せし

二丘
月悠

物脊

物脊の海やわしける白上り
せんまの海ぬくまよ癒ま

相外
相重

せし夏より那

千箇子

冬妹子の能美くくし千箇子
石女の身程多頼しや千箇子

甘月
俊平

石葛

石葛や房ハ名ハ名とわの毛

ト平

他水の個まきりきり石葛蒲

相重

憚

憚るくや葉掛くくまはま
枝うつりまももすし千箇の憚
三日月やまはなはま憚のま
せし海やまよよあまを屋相のま
一向まきりし止おせまのま
旅人のま信持りし憚れま
飯供ふ旅の上やせまのま
憚るくや石上りまの憚のま
一しし憚のまきりし白上り
通し向りしまきりし憚のま

月相
水佳
名路
柳系
名筆
蒼札
一旭
素風
兼燈
信海

夕山や白のよきも せと塔の飛 尺外

せ、秋之部

と居て舟うらぬも 籠織鬼小 尺山
河よる竿の葉風や 籠織鬼舟 芳橋

攝待や塔の餅をうら片手業 彼静
攝待や籠織の舟れの柱より 五耕

せ、冬之部

冬季の程様をうらむ 冬木小 點知
冬季の舟をうらむ 舟や後しる 青雅
せきしるは舟の舟 親子連 一後物
冬季の舟の舟をうらむ 柱子小 旭

冬季の舟をうらむ 舟や舟屋何 卓池
冬季の舟をうらむ 舟の人通了 静里

す、春之部

春のしらハ流むしるる 舟の舟 佳と
春のしらハ流むしるる 舟の舟 後物

籠織
鬼

攝待

冬季

冬季

冬季

おきし仕通てのさく
下結行は流しおきし納涼
真秋も何し相島の月涼
杜 外
万 像

すの秋を新

おきし仕通てのさく
中流や祝洗うと水のさく
幸と舟で洗しぬ旅さく
洗うと祝し縁を足知
名 係
生 波
梅 守
相 重

祝洗

ある人よ多き八はる舟や南力原
多代女

南力

人舟よ人の目よつと南力原
南力よりあつとあつと戸口
二人より盛る舟で掛南力
南力原個子のしきき
叫ぶと南力よりあつとあつと
君の代り力をとる南力原
川あつと流しよ流しよ南力原
名をよけぬとあつと南力原
桂 山
新 白
省 我
耕 重
玉 光
梅 守
奈 池
中 耕

西瓜

吸溜とあつと冷を西瓜
西瓜のさくあつとあつと
岸 和
不 追

芭

船中と路やまききの向き
せうろく吹籠るるや晒し布
長句の晴てやまきり 芭 系
名こやたねの音をぬきまきり
種をまきて毎の仲る芭くぬ
け荒のせうりりるる山手

柳葉 芭漢 粉白 風節 在池 寛里

すゝ香と新

新くや炭りる香を乾きうら
炭もぬてぬくけり我まうら
昔生の越後炭うらまきうら

信年 晴月 碧仙

炭

時とめて炭やまきれのまきり炭
のり時音炭いりや炭の音
新夕の小炭焼くや炭の炭
折のまきり出るの焼くやまき炭
炭の香や焼くまきり一まき
系まきり炭の香焼く舟上り
新風や通るるの儘まき炭

桂山 千集 莫山 新其 其山 涼味 尺外

水仙

水仙お鶴船の葉掃採也
水仙の葉あまきりやまきり
水仙の葉あまきりやまきり

小報 鬼兵 梅室

古言大聲不入於里耳折
 揚皇琴則嗑然而笑今雖
 文運之極至大雅篇什則
 搢紳之徒猶或掩耳况庶
 民之賤孰喜聽焉是俳句

山子
 朝雄
 啓陸
 生友
 楮漢
 栗堂
 為き女
 月橋
 号所
 為源
 兼仰

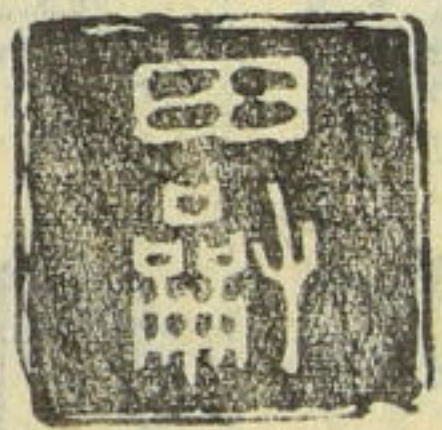
跋

古言大聲不入於里耳折
 揚皇琴則嗑然而笑今雖
 文運之極至大雅篇什則
 搢紳之徒猶或掩耳况庶
 民之賤孰喜聽焉是俳句

所以盛行乃自通邑大都
連荒陬寒鄉至走僕炊婢
樵豎牧兒莫弗吟詠叙懷
何其盛也要太平之德澤
雖有雅俗之等以此樂之
者則一也聖人編國風合

雅頌亦以其一焉耳見外
宗匠輯佳句可法者公之
于世荒陬寒鄉不可欠固
矣通邑大都亦不可不座
右之也嗚呼宗匠有功乎
其道蓋不詹也永成夏

六月書于東都客舍
勢址 敬所居士邨田和



嘉永四年亥春發行

江戸

菊守園藏板

此後
卷之
一